

多文化共生のまちづくり・未来への第一歩

-提言作成とフューチャーセンター-

Gehrtz 三隅 友子

GEHRTZ-MISUMI Tomoko

徳島大学国際センター

要旨： 国際センターは平成 25-27 年度に文部科学省の委託により留学生交流拠点整備事業「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地位の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」を実施した。本事業は留学生らの地域における様々な交流活動を通して、地域の課題を一緒に考える基盤づくりをするものである。課題として「多文化共生のまちづくり」を掲げ、事業に関わった人たちが3年間の取組をまとめ、まちづくりを行動に移すための提言（合言葉）を考えることも行った。最終年度（平成 27 年 9 月）に、常三島キャンパスに新設されたフューチャーセンター（地域住民が地域の課題解決を協働で考える場）にて地域の様々な人が集まり、提言づくりの活動が行えた。本稿では事業全体を振り返り、特に本事業のデザインの要としての PLAN4（①広報②成果物③最終フォーラム等の促進とまとめの企画）を省察し、現段階で得られた知見を記述する。今後とくしま異文化キャラバン隊の活動を「サービスラーニング」に位置づけて、大学に与えられた「地域の知の拠点」・「地域創生の推進」の役割を担い、かつ展開することを考えたい。

キーワード：フューチャーセンター・サービスラーニング・演劇的知・多文化共生・デザイン

1. はじめに

国際センターは平成 25 年度より 3 年間「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」のテーマを掲げ、留学生を中心とする様々な活動を行ってきた。本事業は、徳島大学が中心となって地域コンソーシアムを組織し、留学生と日本人学生からなる「異文化キャラバン隊」を各地域へ派遣することにより、地域の人々との異文化交流を通じて「外国人が身近にいることが当たり前の国際社会」「文化や習慣の違いを認め合いながら暮らしている姿」を目標に展開した。実際には徳島県を舞台に 4 つの PLAN を実施した。

PLAN1：徳島市内を中心とした組織や団体との交流を中心とした多様な活動

PLAN2：徳島県西部美馬市と「脇町劇場オデオン座」でのパフォーマンス活動

⇒名称「まほろば国際プロジェクト」

PLAN3：徳島県南部美波町の日和佐八幡神社の祭りを支援する活動

⇒名称「日和佐の魅力発見！プロジェクト」

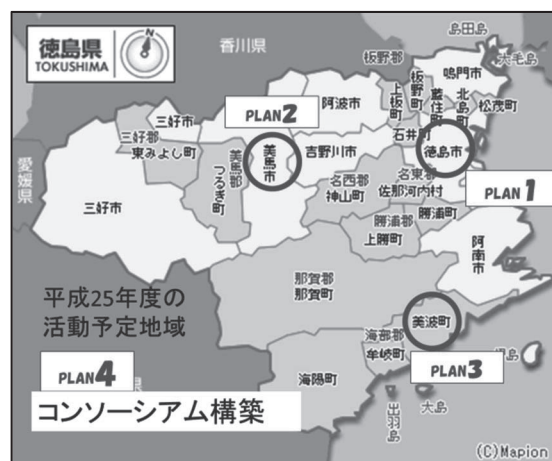
PLAN4：PLAN 1 - 3 の活動を総合的に推進しながら、総括しそして成果をどのように活用し継続していくかを集約する。⇒ 事業をデザインする。

3 年間の詳細は本事業の以下の URL を参照

されたい。また本誌年報部分の資料 1 にコンソーシアム組織図を、また資料 2 には活動内容一覧を記載している（注 1）。

<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/index.html>

図 1:PLAN と県内活動予定地域の関係

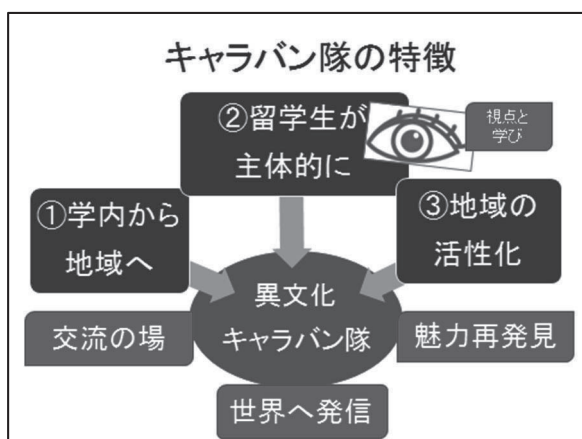


2. 徳島大学の留学生交流拠点整備事業

2.1. 活動の特徴<留学生の学び>

徳島県内の高等教育機関で学ぶ留学生らが中心となって、県内での交流活動に参加するものである。これには次の三つの特徴がある。

図 2：キャラバン隊の特徴



一つは、交流の場を学内から地域へ移して様々な活動をする。二つ目は、活動自体の設定はコンソーシアム内の担当者がするが、その土俵上での取組は留学生と地域の人たちが主体的に行う。三つ目は、留学生らの視点から新たな町や地域の魅力を発見していこうというものである。最終的には交流活動と再発見した内容をその魅力とともに、県内外そして広く国内外に発信することも目標としている。

留学生らは学内で、日本語学習や専門の研究を行っている学生である。大学の一步外に出れば、社会の一員としての存在でもある。外国人が日本社会で生きていくための様々な能力は大学だけで培われるものではない。大学と寮とアルバイト先というごく限られた空間と人間関係の中で生活している者もいる。一方キャラバン隊にて体験する活動は、いわゆるサービスラーニング（注2）に向かうものとする。サービスラーニングは（Service-Learning）最も広義の解釈として「教育目的で行われる社会に役に立つ活動がやりっ放しではなく、最低限、振り返りの場面をとめない実施されるプログラム」である。そして、徳島大学からのキャラバン隊参加者の多くは共通教育「日本事情」（上級日本語学習者が日本語と日本の文化や社会を学ぶ）「日本語研修コース」（初級日本語学習者が集中的に日本語を学ぶ）「全学日本語コース」（研究を中心に行う初級から中級の日本語学習者のため週二回のクラス）の受講者であり、日本人学生の意味とはまた少し違うことも考えたい。

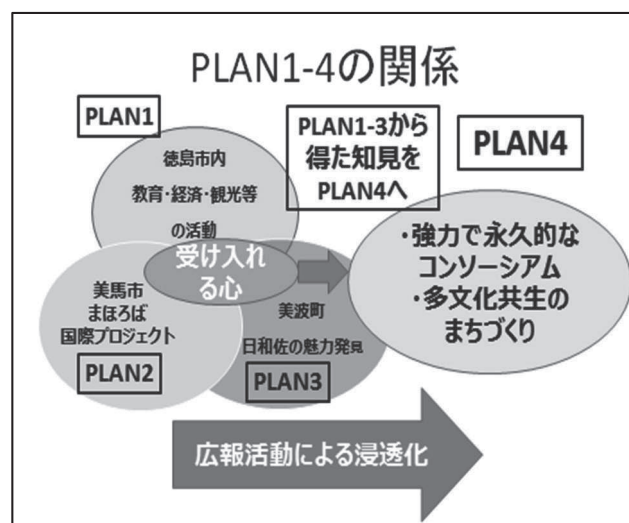
大学で学ぶ専門的な知識や技能等を社会的活動に関わって、深く学ぶというより、今学びつつある日本語を使って活動をしていくことからさらに日本語と日本文化を体験的に理解していくという学びである。

当初留学生らにキャラバン隊への参加を呼

びかける内容として、①日本語力を伸ばせる②地域で友達を増やせる③徳島の魅力を発見して発信していける、の三つを考えていた。地域の課題を一緒に考えてアイデアを出しながら解決に向かうという視点を入れることも実際には行ってきた。今後、留学生が実施するサービスラーニングという位置づけを学内で確認かつ整備していく予定である。

2.2. PLAN4 の位置づけと内容

図 3：PLAN1-4 の関係



前述のように PLAN1-3 を総合的に推進しつつ、最終的には本事業のまとめを行うのが PLAN4 である。また図のように PLAN1-3 での留学生との交流体験から、地域の人たちが気づいたあるいは培った「受け入れる心」を「強力な永久的なコンソーシアムの構築」から「多文化共生のまちづくり」を目に見える形にするのも PLAN4 の大きな役割とも言えるだろう（注3）。

2.3. PLAN4 の目標

平成 25 年度当初の事業計画としては次の四つを目標とした。

- ① 徳島県留学生交流推進会議を母体としてさらに交流を深める団体や組織を増やし、新たなコンソーシアムの構築と活動を活発にすることによって充実化を図る。
- ② とくしま国際フレンドシップ憲章（平成 20 年 3 月徳島県が制定）の三つの行動目標の合言葉「知りあおう、ふれあおう、みとめあおう」の次のことばを提言とし

て作成する。

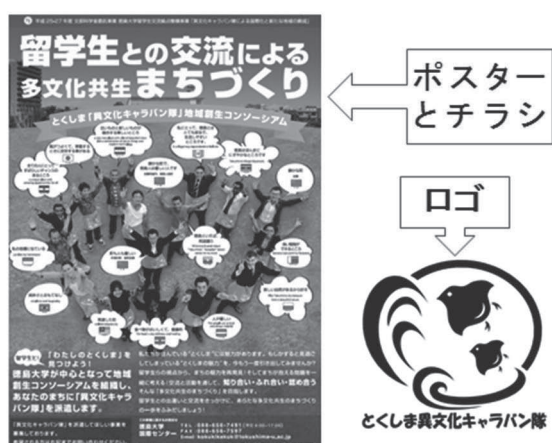
- ③ 活動に関わった人からの物語をまとめた報告書を作成する（留学生との交流活動を企画運営した側からの、留学生との交流を通して参加した人たちの変化や自分の気づきを一つのストーリーとして記述したもの）。
- ④ 前述の成果を共有するためのフォーラムを開催する。

実際には、PLAN1-3 を実施しながら PLAN4 を整備し活動を進めた。

2.4. 広報活動

PLAN4 は本事業を多くの人達に知ってもらうための広報活動を平成 25 年 9 月からスタートさせた(事業の委託決定は7月後半であった)。まずポスターとチラシを作成し、県内の教育機関、理容組合、調剤薬局等に配布し各所に貼ってもらえるようお願いをした。ハート型に V サインで並ぶキャラバン隊は徳島大学と鳴門教育大学の留学生と日本人学生の 16 名である。

またシンボルマークに千鳥を選び、波間に浮かぶ二羽の千鳥がさらに海に飛ぶ様子をロゴとした、このデザインは、本学のデジタルアート部の学生にデザインを依頼し作成されたものである。さらに、留学生らが活動中に目立つように、ロゴを配したオレンジ色のエプロンを 50 枚作成し、活動中には必ず装着することにした。さらにロゴ入りクリアファイルも同時に作成し、中にチラシを入れて活動の相手先や事業宣伝のためにも配布を行った。



写真のポスター内でキャラバン隊が着用しているのがこのエプロンである。元気が出てかつ目立つという点と外国人の存在を身近にするために、オレンジ色をシンボルカラーとした。

最後に本事業の詳細をいち早く広報するためにホームページを作成し、概要と理念さらに実施ごとに活動記録及び報道記録を掲載した。徳島大学の大学紹介アプリにも同じ内容を簡略して掲載することを3年の間続けた。

2.5. 成果物

活動を通して、内容の記録と新たな広報の意味で成果物もできる限り作成した。成果物にはプロジェクトワーク型の教育活動と産出物の意味があり、実施者の振り返りと新たな実施者が目標を明確にできるという役割もある。

印刷物は次の三つである。

- ① 日和佐の魅力発見！フォトブック (H.26 年度)
- ② 徳島の魅力発見！フォトマップ (H.27 年度)
- ③ 日和佐の魅力発見！フォトマップ (H.27 年度)

これらは、フィールドワーク型のプロジェクトワークの成果物として作成したが、写真と日本語・英語・中国語のキャプションから町の紹介や観光の目的にも使用が可能である。また②と③に関しては、デジタル版を国際センターホームページに掲載予定である。

映像は次の六本である

- ① Rediscovery HIWASA (H.26 年度) 12 分
- ② まほろば国際プロジェクト 3 本×3 分 (H.25-27 年度)
- ③ 外国人お遍路体験 (H.26 年度) 5 分
- ④ 多文化共生フォーラム (H.27 年度) 3 分

映像は徳島大学ホームページ内の動画集から視聴が可能である(注4)。

いずれも、これらは記録としてだけでなく、活動を一過性のイベントとして終わらせないように、多くの人に見てもらい、自分たちの町や活動にもキャラバン隊の参加ができないかのヒントにしてもらうことが目的であった。また留学生らにとっては自分の写っている映像を自国の友人や家族に見せて、地域の活動に参加したことを広く発信してことも考えて作成した

3. 報告書「多文化共生のまちづくり・未来への第一歩-徳島から発信する受け入れる心の育成」

3.1. 作成にあたって

平成 25 年 9 月 30 日に、本事業の第 1 回連絡

会を開催し、概要と活動目標を提示し承認され、キックオフの場となった(学内外 50 名の参加)。さらにコンソーシアムの母体である「徳島地域留学生交流推進協議会及び運営委員会(年に1回ずつ開催)」では、事業への協力依頼と経過報告する場となっていた。この中で、商工会議所のように本事業に賛同し、新しい活動の企画が生まれ実施に至ったものもある。またこの間にポスターやチラシを見てキャラバン隊の活動を知り依頼が来るようになってきた。当初の目的通り、一般の地域住民とキャラバン隊をつなぐ役割をするコンソーシアムのメンバーが活動を通して明確になってきていた。そこから物語を作成することを考え始めたのが平成 27 年の夏であった。こうして 10 月 2 日第 2 回連絡会を開催し、報告書の作成を依頼した。11 月末の締め切りで各自が作成に取りかかり、1 月末に完成した。この書の特徴は、単なる活動報告ではなく、① 3 年の事業の総まとめとする②キャラバン隊との活動を通して生まれた物語を書く③各物語が県内外の同種の組織や機関のヒントとなるように広める、の三つであった。それぞれの立場から活動を振り返り、課題(テーマや組織の概要)、取組(発見や気づき)、成果(様々な視点から)、未来に向けての四つの観点を書いて、活動中の写真を多く掲載することにした。これから活動をしたいという人たちに印象強くまた興味深く読んでもらえる工夫を試みた。

3.2. 構成

表 1: 報告書の構成

はじめに
PLAN1 Case Studies 14 の物語
PLAN2 まほろば国際プロジェクト
PLAN3 日和佐の魅力発見!プロジェクト
VOICE 留学生の声 4 名
まとめにかえて
資料 活動一覧とコンソーシアム図

表のように PLAN4 以外の内容を掲載している。「はじめに」では、徳島大学が経験した多文化理解の問題と多文化共生社会を考える意義そして本事業の概要を記述している。そして PLAN1-3 の内容である。「留学生の声」は、キャラバン隊として参加した 4 名の留学生(エルサルバドル、中国、クロアチアの初級から上級の日本語学習者)のスピーチ原稿を掲載した。日本語のクラスで学びながら、様々な活動に参加し何を考え、何を学んだかが個々の言葉で語

られている。そしてこの経験が日本語学習の大きな動機づけになっていることがわかる。

最後の「まとめにかえて」は、活動を通して生まれた新たなエピソードと、他地域の事例を紹介しながら今後徳島で展開する新たな日本語教育事業の可能性も述べている。いずれも、これで終わりではなくまさにこれから始まることを確認した記述である(注 5)。

3.3. PLAN1<14 の物語>

14 をさらに「教育・生涯教育」関連の五団体

- ⑤ NPO 法人徳島共生塾一步会
- ⑥ 徳島市立高等学校
- ⑦ 徳島県立中央テクノスクール
- ⑧ 小松島市中央会館
- ⑨ 徳島市渭北公民館

「協会」関連の三組織

- ⑩ 藍住町国際交流協会
- ⑪ 徳島県女性海外派遣交流会(ハロー)
- ⑫ 徳島ユネスコ協会

二つの県の機関

- ⑬ 徳島県立近代美術館
- ⑭ 徳島県立博物館

「経済・商業」の三機関

- ⑮ 徳島商工会議所
- ⑯ 市岡製菓株式会社/株式会社ハレルヤ
- ⑰ 株式会社袖りっ子
- ⑱ 県職員の研修機関
- ⑲ 徳島県自治研修センター

と五つに分けた順番としている。それぞれの物語は報告書の内容を参照されたい。手に取って読んだ県内の学校や公民館が同じような活動に興味を持ってもらうことが目的である。

交流協会の内容は、これらの会に参加してみたいという人が増えることを期待したものである。さらに他の県内外の企業が続けて似たような取組をする可能性の端緒となることを願った。そして最後に県職員の研修を行う自治研修センターには、キャラバン隊に代表される外国人と地域住民を県職員としてつなぐ役割のある人を養成する立場にあることを意識してもらうことを念頭においた。

もちろん 3 年を通して、他の組織や機関もあったが代表としてこれらの 14 の物語を掲載した次第である。執筆依頼の中で原稿作成に至らなかった団体もあったのは事実である。報告書の意味を伝えることができず、大学とのパートナーシップが結べていない関わりもあったことが確認できた。しかしこれも第一歩であり、今後活動を企画・運営・評価していきながら新

たな関係を構築していきたいと考える。

また違った視点からは、この報告書は本事業への各団体の積極的な参加（たとえ無理やり書かされたとしても）であり、自己評価と他者評価さらに継続的な改善をも含んだアセスメント（プログラム評価）と言えよう。

3.4. PLAN2 と PLAN3

PLAN2 の「まほろば国際プロジェクト」は、実践研究として日本語教育と演劇的知の在り方を考えるという位置づけと、文化財としての脇町劇場オデオン座（物的リソース）の存在と活用を記述している。次年度からは、学内の日本語教育（外国人に日本語を教える立場）と学外の演劇教育の研究者とのネットワーク（人的リソース）と美馬市の市長以下国際交流員、学校関係者等（社会的リソース）の三つのリソースがそろっている。これらを活用して、最終プロダクトを演劇とするプロジェクトワークを実施することと、演劇に至る過程で町の活性化を実現に向けた活動を行い、次の研究段階へと進む予定である。

そして PLAN3 の「日和佐の魅力発見！」は、新たな高大連携を追究しながら、自治体を中心として地域の中学・観光ボランティア・企業が協力するフィールドワーク型プロジェクトワークを行う。成果物でもあるフォトマップとそのデジタル版を活用し、これをもとに町おこしに取り組む団体や人々と協力して、次の行動に移す計画である。

PLAN2.3 いずれも社会貢献の活動として、大学あるいは高校の教科学習と結び付け、教育課程の中での正式に位置づけ、サービスラーニングとして整備していく所存である。

3.5. アンケートによる事業評価

3年間の PLAN1-4 のほぼ全部の活動に対して、キャラバン隊参加者と受け手の機関や日本人に対して、アンケートによる評価を行った。

キャラバン隊には、①活動自体について②日本人との交流について③日本や徳島の文化の理解について④今後の活動への参加について⑤感想（自由記述・日英中）⑥活動個別の質問（この活動の改善点等）を問うた。

そして日本人には、①留学生が参加することについて②外国人に対する印象に関して③今後の活動への参加について④留学生の視点やアイデアを取り入れたい活動の有無と活動案⑤外国人との交流について（自由記述）を問うた。

平成27年度のキャラバン隊の評価(10活動)は、おおむね活動自体はよかったことや交流ができたことが述べられていた。活動によっては理解があまり深まらなかったものもあったが、もっと参加したいという声は得られた。特に PLAN3 の祭りに関しては、感想意見の中に、この地域の問題点、解決策、お祭りで驚いたことや自国の祭りとの比較を丁寧に英語や中国語で書いてくれている。それらを翻訳して日和佐の人々に伝えることや、共有する機会を作って互いに問題解決を考えることがこれからの課題であることもつかめた。一方の、日本人側の評価(8活動)では、当初参加することへの不安があったり、交流によって印象が変化したりさらに考えが広がったりした、の記述もあり、もっと一緒に活動したいや活動へのアイデアがこれまでの2年よりも多く書かれていたことが特徴的であった。また「地域の課題を外国人(留学生)の視点を加えて考えることの可能性に気づいた」

というコメントもあった。

今後の課題として、キャラバン隊と日本人あるいは受け入れ側の評価項目の立て方を見直す必要がある。それは、中立な問いかけによってより本当の気持ちや考えがつかめるように設計されているか、「楽しかった」という評価に終わっていないかという点と、地域の課題を共に考えるという構造や問いかけになっているのかという点である。

なぜこのアンケートを書くのかを明確にして、結果を次の活動に必ず活かすことを伝え、活動に積極的に参加するのと同時に評価のすることが大切なことを周知していきたい。またこの評価項目自体もこれまでのものを提示することによって参加者に考えてもらい、一緒に作ることもできるだろう(注6)。

まさにこの評価を活かした新たな活動設計ができていけるかがこの事業を継続していくポイントであると考え。この経過も含めて次の機会に改めてまとめを報告する予定である。

4. 多文化共生フォーラム

4.1. フューチャーセンターとフューチャーセッション

従来の枠組みでは解決が困難な社会的事象や課題に対して、組織、所属、立場が異なる多様な人々が集まり、未来志向の対話、デザイン思考の手法から、新たな発想、解決手段を発見・共有し、相互協力の下で共創、社会実践するための「場」、「イノベーションプラットフォーム」

として、フューチャーセンターが徳島大学常三島キャンパスの地域創生・国際交流会館5階に、本事業の実施中の9月に開設された。

国立大学初の設置となるこのフューチャーセンターは愛称『A.BA』〈阿波の国の“あばばい(眩しい)”場〉と名付けられている(徳島大学地域創生・国際交流会館パンフレットより)そしてここで行われる課題解決に向けての活動をフューチャーセッションと呼び、参加者が主人公であり、活動を統括する役割のコーディネーターとさらに刺激を与えるファシリテーターがそれぞれの役割を果たしていく。

場としては、新たなアイデアを産出するための工夫がなされている。講義を聞く、意見を発表するという講義室的な場以外に、畳スペース、映像を見るためのシアタースペース、五感を働かせるキッチンスペース、一人で考えるカウンタースペース、複数で話し合う応接スペース、グループでアイデアを練るための様々な形の椅子と机がフロア内に設置されている。参加者は目的に合わせて自由に空間を使うことができるのが大きな特徴と言える。

こうしてフューチャーセンター及びセッションが本事業の目指すまとめの活動を合致することを確認し、この場でフォーラムを実施することが可能となった。

4.2. フォーラム〈内容と場〉

平成28年1月23日にフューチャーセンターにて実施した内容、担当、目的、場・形を表にしている(資料3と4)。

内容は、①講演とワークショップ②キャラバン隊によるスピーチと交流③活動報告会④提言の作成であった。この日は約50名の高校生、大学生、県及び市の自治体職員、交流団体会員、NPO法人関係者、教員、学芸員と地域住民が参加した。

特に、キッチンスペースを使って、企業が自社製品を紹介し、簡単な調理によって試食会ができたこと、また昼食時には留学生らを含んだ6グループがセンター内で自由に交流しながら食事ができたことはこの場の持つ意味であろう。

さらに、提言作成の際にもこの場は威力を発揮した。五角形になる机と椅子を動かして簡単にスペースが作れることから、インプロを行うための広い場所の確保と、個人作業からグループ活動に適していた。最後にはグループごとに舞台を想定してドラマを発表してもらった。

実際にドラマにする前には、例として「学び

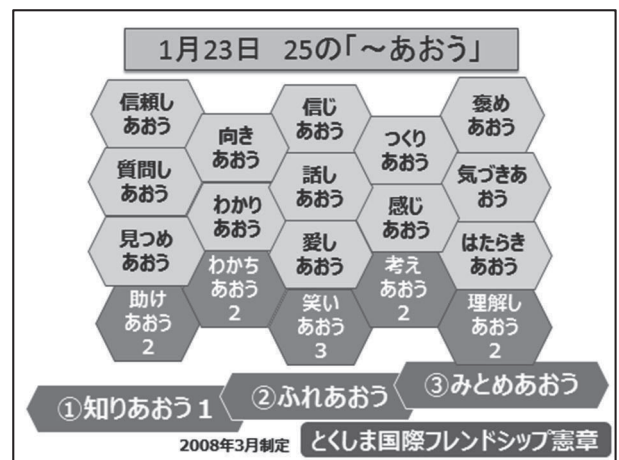
合おう」を提示し、実演をしてからグループでの作業を行った。このように演劇的知を使うことと、一人一人の考えを明らかにしながら、他者の意見も聞き、それを一つにして協力して演じるというタスクを課すことで「対話」の場をつくることを考えた。内容ごとに参加者に知識や方法の刺激を与える活動を促進させる機能が果たされ、まさにフューチャーセッションを体感することとなったと考える。また様々な活動の目的に応じた場の使い方ができたように思う。

4.3. 提言

この提言作成に関しては、とくしま国際フレンドシップ憲章(2008年3月制定)の合言葉「知りあおう・ふれあおう・みとめあおう」をもとに、次の合言葉(行動目標)を提言と考えた次第である。

提言作成をしたのは25名であった。やはりまずは「知りあおう」が大切とした人もいたが、四つ目の言葉として、「笑いあおう」が三つあげられ、また五つのグループのうち三つが「笑いあおう」を演じた結果となった。

図4: 25名の作成した言葉



4.4. 参加者の声

フォーラム後、25名のうち6名から提言作成に関するコメントが得られた(いずれもメールでの回答である)。

言葉と簡略化したコメントは以上である。

「わかちあおう」: 喜びも悲しみも一人でなく多くの人とわかち合うことができてこそ多文化共生だと思う。イメージしたのは楽しく仲間と食事をしているシーン。心も胃袋も満たされている。仲間とわかちあうことによって喜びは倍増し、悲しみは軽減する。

「見つめあおう」: 外国人と接することに言

葉が通じないという不安を持っている人が多いし、自分もそうである。言語を越えて仲良くなれる可能性を信じて現実に目を向ける姿勢が大切だと考える。

「はたらきあおう」：それぞれの人が自分の専門性を活かして、受け身でなく自己有用感を持ってはたらきかけている理想のイメージから、言葉にした。

「助け合おう」：日ごろから自分が周囲の人に助けられていると感じているから。現実に仕事をしながら異文化を感じている。自然に「助け合う」の文字が書けた。

「考えあおう」：憲章の三つの言葉は理性に基づいているから、グローバル化した社会の中には民族紛争や人権問題が起り続けているから次には「なぜ？」が当然出てくる。ならば「考えあおう」となった。

「笑いあおう」：この日は初対面の人ばかりで緊張したが、ふとした時に笑いあってから緊張感がほぐれ、話やすい空気ができたと感じた。笑顔から始めるのがいいと思ったから。

また「笑いあおう」に関して、一人は、「自分も思いついていたから反対はしなかったがあまり納得はしていない。四つ目の言葉としてどうか？その先の望みがやっぱり笑顔ならばよいが、対話が十分なされたとは言えなかった。とはいえチームで演劇をしたことで、文字だけの提言よりは強く自分のものになっている気もする。話し合いも演劇でできたらよかったかも」また、「憲章が理性なら、笑いあおうは感情である、言葉はいらないし、理屈は度外視。徳島はいつも感情が優先されると思う。『おもてなし』や『同じあほなら踊らにゃそんそん』に続く笑いあおうだと思うと徳島が好きになった。」というコメント、さらに「あの場所に参加された皆さんが、たぶん日ごろから率先されている行動が文字になったのではないかを感じた。笑顔が人を呼び、助けを得られ、理解しあうための大切なツールをしている人たちが集まった結果であり、多くの同じ意見にまとまったと感じる」のコメントもあった。

各自がこの場で考えを持って選ばれた言葉であったことや、敢えて一つにして演じることが難しいと感じたり、演じることで心に残ったと思ったりした様子もわかった。「笑いあおう」がドラマに選ばれたのは、演じる際にわかりやすいということもあっただろう。ドラマ化「はじめ・なか・おわり」の三つのシーンを表現することを課題とした。一例として、はじめで「誰かが泣いている」、なかで「みんなが集まってく

る」、おわりで「手を取り合って笑顔で並ぶ」と表現したグループもあった。もちろん言葉は同じでもドラマの三つは違うものであった。

「～あおう」は必ず自分と他者が一緒にする何かである。「一緒に協力してする」ということが一人一人の心に残ることも目的であった。

四つ目の言葉を確定するのではなく、その場その場で必要と感じる言葉を声にして、実際に行動することこそがこの提言作成の役割と考えている。

5. むすびにかえて

3年間の活動及び提言作成を終えて、現段階での考察をむすびとしたい。

1) <留学生の位置づけの変化>

活動を進めていく中でまた3年の年月を経て大きく変わったのは、留学生の位置づけである。「留学生交流拠点整備業」は、留学生が地域住民と交流を深めながら、地域一丸となって様々な側面の支援を留学生に対して行う仕組みづくりが目的であった。その後平成27年から始まった「住環境・就職支援等受入れ環境充実事業」は、留学生を帰国させるのではなく、就職して地域に定住ということを目標に含めている。これまで親日派や知日派の外国人を育成するという視点から、自らの地域の構成メンバーとしての留学生の役割に期待していることがわかる。徳島等の地域では留学生が就職を希望しても企業側の受入がまだ進まないという事実も体験した。本活動も後半になって企業との関連を見出している。少しずつコンソーシアム内の企業を増やしつながりを深めながら留学生が働ける場を確保していきたい。

2) <日本語教育との関連>

本稿2.1で述べたように、この事業における様々な交流活動は、基本的に日本語のコミュニケーション能力を高めることを目的に行われている。初級者から上級者まで日本人と日本語を使う場であり、現実のコミュニケーションを行う場である。足らなければ、お互いがわかる他の言語を使ったり、絵を書いたり、ボディランゲージを使ったり、自らの持つ全てを駆使して目の前の相手とつながる感覚を努力して保つという言語獲得の方法として考えている。このようなアウトプットの場合と、日本語をクラスであるいは自分で教材を使って学習するというインプットの場の両方がバランスよくなされると、学習者の学習目標の設定のしやすさ、

または動機づけの点でも有効である。徳島大学では教室で学ぶカリキュラムと本事業を通して学ぶことの両方を日本語教育のデザインとしてこれからも実践研究として続ける予定である。

3) <事業の在り方と継続へ向けて>

本事業では年度ごとのまとめと報告が定められており、毎年2月末から3月初めに東京あるいは関西で「留学生交流実務担当教職員養成プログラム」にて、採択大学や機関が講師となって、委員及び留学生交流の担当者向けに事業の概要と達成度を報告する機会があった。合計3回の報告の場で、外から見てこの事業において達成すべく目標のぶれがないかどうか、また期待されていることは何なのかを常に厳しく助言をもらいつつ修正していったという事実がある。

また他大学の報告からは、地域によって留学生や在住外国人の数や置かれている状況が全く違う事を数字以外に現状としても知りえた。だからこそ、それぞれの地域がそれぞれの実情に合わせた対応を地域ぐるみで考えて実施し、また調整していく必要があることも理解できた。決して他人事でなく、自分事として積極的に関わる必要があるということを改めて学べた。今後も協力機関と連携し「とくしま異文化キャラバン隊事業」を継続推進していく所存である。

注:

注1. 本事業にこれまで累計1008人(H25年度168人、H26年度385人、H27年度455人)の留学生、日本人学生が、とくしま異文化キャラバン隊として県内の地方公共団体、NPO法人、企業、初等中等教育機関等、39団体と交流活動を行ってきた。特に、徳島県内の7高等教育機関(香川県1校含む)、10のNPO法人・企業、6つの地方公共団体との間には、既にネットワークが形成されている。

注2. 参考文献S.ゲルモン他「社会参画する大学と市民学習ページiv」の訳者によるキーワード解説及びまた同書208ページ斉藤(著者の一人)の『日本の大学教育における体験学習への活用』項より「また、様々なタイプの活動がある中で、これらが単なるボランティア活動でも、インターンシップでもなく、留学生と受け入れ側地域の双方に有益であり、たとえば祭りの支援や観光のためのマップ作り等は地域へのサービスでもありフィールド教育でもある。その意味で本事業の活動がサービスラーニングと位置づけられるとする。何よりも、活動を動かす教員と参加した留学生の関係だけでなく、現場(フィールド)の組織や団体の存在がこの活動を評価し改善に加わっているという点からも明確である。

注3. PLAN1-3の活動が大目標からはずれないように、そし

て活動を全体から見ながら評価しつつまとめていくというアセスメントの役割もPLAN4は持つ、たとえば、味も色も違う三つの団子をまとめて食べやすくする串のようなものとして捉えている。

注4. 徳島大学ホームページ動画集内

http://www.tokushima-u.ac.jp/about/publicity/introduction_video/campus_9.html

注5. この報告書は電子ブックとして国際センターホームページから閲覧可能にする予定である。

注6. この評価のデザインこそが、本事業の個々の活動をサービスラーニングとして位置づける重要な点であると考えている。

参考文献

THE 00PROJECT TEAM 石原薫訳(2014)「シビックエコノミー世界に学ぶ小さな経済のつくり方」フィルムアート社

A.ニューバーグ他、川田志津訳(2014)「心をつなげる-相手との本当の関係を気づくために大切な『共感コミュニケーション』12の方法」東洋出版

S.ゲルモン他山田一降訳(2015)「社会参画する大学と市民学習-アセスメントの原理と技法」学文社

加賀美常美代(2007)「多文化社会の葛藤解教育価値観」ナカニシヤ出版

加賀美常美代他(2012)「多文化社会の偏見・差別-形成のメカニズムと低減のための教育」明石書店 異文化間教育学会

鎌田東二他(2015)「スピリチュアリティと教育」ビイング・ネットプレス

山田泉(2013)「多文化教育I」法政大学出版局

渡辺靖(2015)「<文化>を捉え直すーカルチュラル・セキュリティの発想」岩波新書1573

付記:

本研究は、H25-27 文部科学省委託留学生交流拠点整備事業「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地位の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」の成果の一部である

資料3 ワークショップ：「留学生との交流による多文化共生まちづくり」 2016年1月23日(土)
 於：徳島大学地域創生・国際交流会館5階 フューチャーセンター

番	時間	内容	担当	目的	場・形
1	10:00 -11:30	講演+ワークショップ 「外国人の人權 -隣の外国人と平和に暮らすために-」	講師：国際交流基金 日本語国際センター所長 西原鈴子氏	・日本社会の現況を把握し、あらなたコミュニケーション「隣の外国人」の必要性を理解し、全員で共有する ・生活の中で今後の対応を共に考える。	講義 島型 写真①
2	11:40 -12:30	スピーチ：日本人への提言(1人約7分) ①日本不思議発見！ ②日本とアメリカの違い ③日本と中国の学校生活について ④日本の治安について ⑤日本のガラケー文化	徳島大学留学生5名 中国3名・アメリカ2名	徳島で暮らす留学生(キャラバン隊5名から、文化の違いで考えたことや感じたことのスピーチ(一人約7分)を聞いて質問する。 +初級日本語学習者の参加・自己紹介	講義 島型 写真②
3	12:30 -13:30	食事：留学生12名と一緒に ☆(株)市岡製菓：スイートポテト試食 ☆(株)柚子子：味噌と柚子茶の試食	留学生5名+研修コー ス留学生7名	・徳島の食文化を共有(柚子茶や味噌のおいしい食べ方紹介と試食/キッチン) ・自由に留学生を囲んで食べながらの交流。	自由に 写真③④⑤ 映像
4	13:30 -15:00	報告会：「多文化共生まちづくりにむけて -とくしま異文化キャラバン隊の活動-」 活動報告(全員の紹介を含む)	司会：徳島大学 国際センター 三隅友子	・事業の概要説明と参加者からの取組の報告や今後の予定を紹介し、内容を共有する。 「まほろば」映像放映	グループ⑥ 映像⑦
5	15:10 -16:30	提言作成 ①インプロによるウォーミングアップ ②各自の「～あおう」を考えグループ内で発表 ③1グループ1つ「～あおう」でミニドラマ作成 ④発表	講師：四国学院大学 社会学部 仙石桂子氏 アシタノ学生1名	・とくしま国際フレンドシップ憲章「①知りあおう②ふれあおう③みとめあおう」の、次の「～あおう」のことは提言として1人ずつ考える。 ・ドラマ作成によって5人で意見の刷り合わせ(対話)を行う。身体的コミュニケーション	スペース 島型 5人機 写真⑧⑨ ⑩⑪
6	16:30	記念撮影 自分の「～あおう」を持って	参加者全員で	作成物をみんな確認	写真⑫

参加者：全体で50名 最終活動「提言作成」参加者は25名：高校生/大学生/県及び市の職員/交流団体会員/企業/一般/NPO/教員/学芸員

資料4 場の使い方

ワークショップ：「留学生との交流による多文化共生まちづくり」 2016/01/23
 於：徳島大学地域創生・国際交流会館5階 フューチャーセンター

写真番号	場の使い方	
講演① スピーチ②		ディスカッションスタジオ スクリーンを見ながら
食事 ③④⑤	 コネクティブ・キッチン 調理と試食	インスパイア・スペース 畳部分 ダイアログテラス ソファ部分 自由な使い方  
報告会 ⑥⑦	 ディスカッションスタジオ 司会と報告者	ライブスタジオ 映像視聴 (二つの大画面) 
提言作成 ⑧		ディスカッションスタジオ 机と椅子と移動 ⑧インプロ形式ウォームアップ 身体を使う ファシリテーターによる誘導
提言作成 ⑨⑩		ディスカッションスタジオ 机と椅子と移動 ⑨各自作成 五角形机 ⑩グループで一つに 場を自由に使って練習 
提言発表 ⑪⑫		ディスカッションスタジオ ⑪ドラマ発表 スペースを使って ⑫各自の提言と スクリーン前にて 